

## シンポジウム

# 多様な視点で「防災・減災」に取り組むために ～支援のカタチを考える～

震災から6年が経過し、震災の風化が危惧される中、改めて私たちの経験とそこから学んだ教訓を伝えていく必要があります。特に、障害者・外国人・高齢者など、多様な人々の被災時の経験は、その支援のあり方も含め、被災地の共通のテーマとして、今後につないでいく必要があります。

そこで、多様な視点で災害時の支援活動に取り組む方々とともに「支援のカタチ」を考えました。

日時：2017年9月17日（日）13:30～16:00 会場：エル・パーク仙台セミナーホール

### <パネリスト>

**阿部 一彦(あべ かずひこ)さん** <障害者の立場から>

社会福祉法人 仙台市障害者福祉協会会長

**内田 有美(うちだ ゆみ)さん** <性的マイノリティ支援の立場から>

性と人権ネットワーク ESTO スタッフ

**鉢呂 智子(はちろ ともこ)さん** <外国人支援の立場から>

仙台白百合学園高等学校 SGH 運営委員会委員長

### 【阿部 一彦 さん】



震災前は、災害時の障害種別の支援について冊子をまとめたり、災害時障害者専門ボランティアの養成・登録事業を行うなどの取組を行ってきた。震災発生後の取組は、安否確認で、名簿があることは大事だと思った。福祉施設で福祉サービスを受けている人は事業所とつながったが、受けていない人は大変な思いをした。障害に基づく不便さ、大変さは災害時もっと大変になる。何が不便なのか、何で困っているのか発信する力を身に着けていこうと思う。取組で良かったと言われたのは情報。仙台市が出す情報を選択しながら文字版、点字版、音声朗読版など様々な形で発信した。仙台市内では指定避難所から福祉避難所に入ることができたが、福祉避難所につながれた人は数少なかった。避難所では障害者はトイレや移動が大変で暮らせなかった上に、仕方なく自宅に戻っても情報や食料、物資が入らなかった。

仙台市が12月に行った「あなたは災害発生時、ひとりで避難できますか？」という調査で、身体障害の方と難病患者は「できる」という人が多く、知的障害と発達障害の方は「できない」が多かった。理由は、介助者がいないと移動できない等があったが、避難所では暮らせないと考えている。その後改善されたことも含めてわかりやすく発信し、より良い避難行動につながるような取組をしていきたい。

## 【内田 有美 さん】



東日本大震災時、セクシュアルマイノリティは「いない人」とされ、避難所にも地域にも当事者が見えなかった。当事者はどこにいて、どのような生活を送ったのか知りたいと思い、当事者の被災状況の調査を行った。結果、避難所での問題は、トイレ、風呂、更衣室等、設備が性別で分けられていること。避難所の区分は家族や血縁者で、同性のパートナーと一緒にいられるかが不安。健康については薬の処方は大変大きい。HIVの薬、性別に合わせて注射や治療をしている場合は治療薬が手に入りにくい。普段からセクシュアルマイノリティは精神疾患のリスクが高い。医療機関で性別を確認されたらどうしよう。心とからだの性別の違いをどのように認識されるか等々が明らかになった。また、地域とつながっていなかったため、避難所の場所や支援物資はどこでもらえるかもわからない。当事者は避難所に行くという選択肢を持っていない。安全な場所に行けないという命を守る最低ラインで脅かされている現実。相談や支援につながる事が難しい背景に、性の多様性に対する社会の理解不足がある。ESTOでは、当事者から災害時の不安、欲しい支援を聞き、防災ガイドブックを作っている。当事者がカミングアウトしなくても自分に合った支援を受け入れられる社会を作っていきたい。セクシュアルマイノリティが必要とする支援はいろいろな人が生きやすい、安全な社会につながるのではないかと。

## 【鉢呂 智子 さん】



東日本大震災後、震災関連の様々なデータを確認する中で、外国人への支援が立ち遅れていると気づいた高校生たちは、地域の防災に関する活動に参加し、災害時の外国人への支援のあり方について調べた。言葉が通じず、避難所のルールも理解できないために避難所から去ったケース等も聞いた。災害時の言語問題が外国人支援の大きな壁だと感じた。そこで、外国人支援の立場から英語版の減災パンフレットを作成することとなった。外国人のわかりやすい日本語講座に参加してパンフレットに使う言葉を選んだ。日本独特の道徳観をどう理解してもらおうかも研究課題とした。外国人への調査、支援団体からの情報も盛り込んだ。パンフレット作成にかかわって、高校生たちの意識の変化は大きかった。「遠い誰かのため」は今の自分に関わっているととらえている。結論を出して終わりではない。行動は誰にでも伝えられる、ノウハウを伝えられる。この経験は、今、彼女たちのキャリアにも影響を与えている。



### ＜参加者から＞

- \* マニュアルや防災ガイドは大人の視点のものが多く、実際必要な人に届かないという高校生の活動に学ぶ点があった。
- \* 震災時、障害のある方やセクシャルマイノリティや外国人の方が困難を抱えただろうと思っていましたが、今日参加して、日本社会の仕組みが多様性に対応するよう改革されなければならないと感じた。
- \* 多様なバックグラウンドを持った方々にいかに配慮して暮らしやすい地域にしていくか改めて考えさせられた。

# 「市民のための防災力UP講座」各地域で開催！！

女性防災リーダーは、養成講座終了後、各地域で地域性に合った取り組みを展開し、さらに、様々な学習や実践を通じて、力をつけてきました。その力を活かす機会として、さらなる女性たちの輪を広げていこうと地域の女性たちを対象に「女性のための防災力UP講座」を、今年度は、地域に住む一般男女を対象に「市民のための防災力UP講座」を企画実施し、地域の防災力UPをめざし、活動に取り組んでいます。「市民のための防災力UP講座」は、宮城野区・青葉区・太白区・若林区、岩沼市で開催し、「なぜ、防災・減災に女性の視点が必要か」「災害に備えて～サバ飯づくりワークショップ」等の内容を中心に各女性防災ネットの協力を得て開催しました。

## 【市民のための防災力UP講座<青葉区編>】

会場：エル・パーク仙台



「災害時、こんな時の対応は・・・」  
避難所づくりワークショップ

## 【市民のための防災力UP講座<宮城野区編>】

会場：宮城野区中央市民センター

「災害に備えて～サバ飯づくりワークショップ」



『なぜ、防災・減災に「女性の視点」が必要か！』

## 【若林区民のための防災力UP講座】

会場：若林区中央市民センター



「若林区の防災 ここがポイント！」

## 【市民のための防災力UP講座【太白区編】

会場：太白区中央市民センター



「協働のコミュニティを学ぶ、クロスロード」

## 【市民のための防災力UP講座】岩沼市で開催

会場：岩沼市民会館



「災害時に役立つ防災グッズをつくらう！（簡易トイレ）」

男女共同参画推進せんだいフォーラム 2017 参加企画

## 落合恵子講演会 いのちの感受性 2017-人権・平等・平和-

主 催：(公財) せんだい男女共同参画財団  
企画・運営：特定非営利活動法人イコールネット仙台

日 時：2017年11月19日(日) 13:30~15:00  
会 場：エル・パーク仙台ギャラリーホール



\*\*\*\*

わたしたちは、震災を体験しました。わたしたちはこの経験によって、改めて「人権」「平等」「平和」の大切さを、そして、それらは決して手放してはいけないものであることを学びました。

危うさが感じられるこの時代、見つめ直し、とらえ直し、一人ひとりが創り出す新しい未来へ向けて、今わたしたちに何ができるのか・・・

\*\*\*\*

落合さんには12年前のエル・パークフォーラムで講演をお願いしている。

落合さんは「人権が当たり前で大事にされる社会、もう少しみんなが深呼吸できる社会に、と思いながら活動してきた。活動の基本は人権・平等であり、人と人の違いは、人を隔てるものでなく、そこから学び合っていける社会でありたい。そんな思いが、果たして12年経って良くなったのか？」と問いかける。

2011年3月、震災以降、落合さんは「HUG & READ」というプロジェクトを立ち上げ、被災地の子もたちに本を送る支援を続けてきた。福島に通い、住民と触れ合いながら、原発反対の活動にも身を置く。

そして、「震災を経験して、私たちはもう少し地に足をつけた生き方を探してきたはずだ。安全で、安心で、誠実な生き方と社会。しかし、自分たち

は何をしてきたのか 自らへの問いかけとこれから何ができるかを考えなければならない」と言う。

また、日本の政治の「今」にも言及し、「どうしてこの国は、あれだけ安全に安心にと言いながら、国民一人ひとり市民一人ひとりの生活を守ろうとしないのか。どうして多くの人にはそれに対して怒りを感じないのか」と危機感を語った。

そして、「違いがあるから一緒にやれないというのはこれまでの日本の運動の形。これからは、柔らかく結びついてうねりを起こしていこう」と呼びかける。

最後に、岩手県の一部で応援歌になっている落合さん作の「天より高く」が会場に流れ、「歩いていきましょう。何があっても歩き続けることを忘れないでいましょう」というメッセージで締めくくった。

★★★★★

## 伝えるカフェ

★★★★★

2017年6月、青木玲子さん（独立行政法人女性教育会館情報課客員研究員）を講師に、『「女性の視点」で震災を伝える～アーカイブの意義とその取り組み～』を開催しました。

もりおか女性センター、福島共生センター、エル・ソーラ仙台、エル・パーク仙台、せんだいメディアテーク等の関係者の参加があり、震災の風化が危惧され、より一層アーカイブの重要性が強調される中で、女性の視点にかかわる震災アーカイブに関する取組の必要性が共有されました。

そこで、団体では、一人ひとりの体験を埋もれさせることなく伝え続けていくために「伝えるカフェ」を定期的で開催することとし、毎回ゲストを招き、少人数で震災を振り返る語り合いの場として実施しています。

### 「伝えるカフェ NO1」

日時：2017年10月28日（土）13:30～15:30

場所：エル・パーク仙台 創作アトリエ

<ゲスト 安倍 彩菜さん>

石巻で大学4年の時に震災を体験。祖母、妹、弟とともに避難所へ。共働きの両親とも会えず、退学し、弟や妹を育てていかなければと考えた。現在は、石巻市役所の嘱託職員として町の復興に尽力している。

### 「伝えるカフェ NO2」

日時：2017年11月17日（金）13:30～15:30

場所：エル・パーク仙台 創作アトリエ

<ゲスト 庄子 千枝子さん>

仙台市若林区荒浜で被災、約5年にわたるみなし仮設住宅の生活を経て、自宅再建し、地域住民を対象に、定期的にサロンを開催している。

.....

「伝えるカフェ NO1、NO2ともに、性別も年齢も立場も超えた多様な方々の参加がありました。参加者からはそれぞれの「3.11」が語られ、その体験や想いの深さが伝わる場となりました。この場では、感想や経験等を書き名で自由に「伝えるカード」に記入してもらおう方法を取り、今後、草の根アーカイブとして活用していく予定です。

.....

発行 特定非営利活動法人イコールネット仙台

発行日 2018年1月

連絡先 TEL・FAX 022-234-3066